外国語教育と聴覚障害教育における言調聴覚論の研究

―序　論―

代表研究員　内　藤　史　朗

言調聴覚論は、ザグレブ大学（クロアチア）のペタル・グベリナ（Petar Guberina）博士が外国語教授法を考案する過程で聴覚障害児の発語訓練に着眼し、大脳生理学（神経生理学）によって、聴覚の正常な者への外国語教育の発音矯正や発音訓練のための原理を、聴覚障害児教室の原理に見出だした結果、生み出された。

わが国の外国語教育を顧みるに、中学から行なわれている英語教育に著しいように、あまり成果はあがっていない。ことに、聞き取り・会話の面では、世界でもワーストの中に入れられても、不思議ではないくらいだ。

これは一つには島国のせいでもあろうが、旧ユーゴスラヴィアのような多言語にして多民族からなる国で生み出された言調聴覚論を研究することは、国際化の波が否応なく押し寄せている今日、大学の外国語教育を担当している者が、こぞって目指すべきことと考え、二年にわたって研究にあたった。

初年度（平成元年度）は、言語学の立場から、グベリナの学説はどのように位置づけられるかをまず考えた。

次いで内外の文献を調べ、その理論的な面の理解を進めた。ここで、この理論は実践を伴わなければ、確証されなければ、教育現場で確信を持てないだろうし、教育意欲も湧かないかもしれないし、学習意欲をそそらないかもしれない恐れを感じ、ザグレブに教育機器スヴァグを発注した。ところが、このグベリナの考案した機器が着荷したのは、初年度の終わりであった。

次年度（平成二年度）は、機器の操作の研究に手間取り、現論と実践の相補的関係の確立まで進むには、時間不足の感は否めない。

しかしながら、現在わが国には、ほんの僅かのスヴァグ（機器）しかなく、その一つが本学にあって、外国語教育だけでなく、聴覚障害教育にも適用できるということは、今後の研究と教育の進展を期待させるものであるのは、もちろん、大学が、国際化という新しい方向へ踏みだそうとしている今、時宜にかなったことである。

今回の研究を通してみて、わが国の外国語教育の停滞は、聴覚障害児教育のある意味での停滞と同じ原因によるのではないか、という疑念を懐いた。軍国化は、障害者を兵隊として役に立たないために、障害児教育を骨抜きにした。敵性語として、英語の教育を骨抜きにし、廃止さえした。ただでさえ島国のため外国人に会う機会が少なかった日本人は、極度に交流

の出来ないハンディを背負った。

障害児の隔離教育とこのような日本人の閉鎖的状況は根が同じではないだろうか。

これは、基本的人権に関わる問題としてまとめるつもりである。

実は、グベリナがわが国で提起した問題は、こういうことも含んでいた。

そう考えると、明治初期のわが国最初の聾教育に遡って、グベリナが計らずも提起した問題をまとめることにしたのである。（これは英文の論文で発表する。）

グベリナの論文はフランス語で書かれたものが多いので、フランス語およびフランス思想の専門家にまとめてもらった。

ドイツ、旧西ドイツの難聴教育の実態が出版されたので、ドイツ語の専門家にまとめてもらった。

英語教育では、わが国でもすでにグベリナの教授法はいくつかの大学で取り入れられているが、まだ普及してはいない。しかし、機器や出版物は出回っている。これからも紹介する必要がある。

最近では、外国人に日本語を教えるテキストも出版され、この方面からも言調聴覚論にアプローチしている。一般には、ヴェルボ・トナル・メソッドまたは略して、VT 法として、その教授法は知られている。

聴覚の正常な学生の外国語教授法は種々あるが、聴覚障害をもつ学生や児童にいちじるしく有効な教授法は、とくに科学的な発語法は、今までのところでは、これに勝るものを知らないという人もいる。

研究グループの一員で聴覚障害教育に関心のある者が、この理論と教授法に心動かされたのは、上智大学聴覚言語障害研究センターで、主任研究員（元聾学校教諭）が就学前の男子の発語訓練を記録したテープを聞いてであった。グベリナの教授法で教える前の、その子のことばは、何を言っているのか、さっぱりわからないものだった。

しかし、この教授法でおしえた後の、その子の話すことばは、明瞭に意味が判った。同じことばを話しているのだと教えられ、またしても驚かされたそうである。

想えば、聴覚が正常な者の外国語も、これに似たことがあるのではないだろうか。自分はまともに話しているつもりでも、相手の外国人には気の毒なくらい聞き取れないことがある。

聴覚障害者の場合、失った音声を尋常な方法では発声出来なかった。聞き取れる範囲内の音声に歪めて聞き取り発声する。したがって、一般には何を言っているのか判らないことがある。

聴覚が正常な者も、母国語については正常であるが、外国語の音声は（母国語にない音声は）、聴覚神経が排除してしまい、近似の音声として聞き取っている。これは、いわば難聴のような聴覚障害と同じ状態にあるのである。

このことを、グベリナ博士は原理的に指摘し、言調聴覚論を提起し、ヴェルボ・トナル（VT）法を考案したのである。（内藤史朗）